

- ・このごろ思うこと ————— P 1
- ・お薦め図書の紹介 ————— P 2
- ・「図書館のちからプロジェクト」活動紹介 — P 3
- ・電子ブック電子ジャーナルの利用方法 — P 4
- ・企画展示の紹介、BOOKセラピー他 — P 5
- ・新任図書委員/退職職員・新職員のご挨拶、展示ケース紹介 — P 6

このごろ思うこと

母性・助産看護学 教授 中島 通子

2019年～2020年は、新型コロナウイルスの影響により私たちの生活は一変しました。不要不急の外出自粛、海外への渡航の自粛等コンビニエントで何不自由のない生活に慣れた我々にとって、この自粛は、思考や自身の取るべき行動、などを改めることが多々あったように思います。そこで1冊の書籍紹介をさせていただきたいと思います。

2019年コロナウイルス感染症による社会・経済的影響の一つとして、カミュの「ペスト」に対する関心が高まり、イタリア、フランス、イギリスなどでベストセラーになりました。日本でも小説の設定がコロナ禍と酷似しているとして話題になり、2020年4月には1969年から刊行されている文庫版の発行部数が累計100万部を超えました。

『ペスト』(仏) : *La Peste*) は、フランスの作家・アルベール・カミュが書いた小説です。出版は1947年で、その10年後の1957年に40歳台前半でノーベル文学賞を受賞したカミュの代表作の一つです。自らが生まれ育った北アフリカのフランス領であった、アルジェリアのオラン市を舞台とした小説です。このアルベール・カミュの「ペスト」は不条理が集団を襲ったことを描いたもので、不条理とは不合理であること、あるいは常識に反している事を指します。ラテン語のabsurdusを語源とし、「不協和な」といった意味を持つそうです。この『ペスト』で描かれる不条理は伝染病のペスト(別名:黒死病、内出血により紫黒色に皮膚が変色し死に至る)です。ペストは過去に3度のパンデミックが確認されており、その第3のパンデミック(1855年～1960年)を元に1947年に発表された小説です。ペスト菌の存在がわからなかった頃には、特定の人びとに原因を押しつけ、魔女狩りやスケープゴート(生贄)として特定の人を迫害するといったことも起こっていました。

カミュは、中世ヨーロッパで人口の3割以上が死亡したペストを、不条理が人間を襲う代表例と考え、ペストが市を襲い、医師やその妻、市民、よそ者、犯罪者など登場させ、人物全員が自分たちを襲うペストに対し助けあい、団結し立ち向かうことがかかれています。それぞれの運命と人間関係が問われているように思います。自分たちは結局何もコントロールできない、人の人生にとって不条理は避けられないことを書いています。

市では突然潮が退いた様にペストは終息し、人々は元の生活に戻っていきます。しかし、ペスト菌は決して消滅することはなく生き延び、いつか人間に不幸と教訓をもたらすために、どこかの都市に彼らを死なせに現れるだろうと物語を締めくくっています。

今、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行に伴いこのアルベール・カミュの「ペスト」はこのコロナ禍と似ている設定であると、増版され購入できる状況になっています。一度読んでみられるのも良いかと思います。

さて、蛇足になりますが、1865年、細菌学者のルイ・パスツール(Louis Pasteur, 1822年-1895年)がファーブル(Jean-Henri Casimir Fabre, 1823年-1915年)を訪ねているそうです。ファーブルは昆虫記にパスツールの昆虫学の基礎知識に関するあまりの無知ぶりに驚いたと述べているそうです。また、パスツールは握手も拒んだと記述されているそうです。その理由は、そもそも、握手の習慣が無かった、潔癖症だったなどの様です。今、私たちが新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染予防対策として行っている三密の一つ、密接にあたり「手は感染のリスクが高い(手は汚れている)」ことを知らないのだろうかといった理由だとも…(真実かどうかは定かではありません)。

家族や友人とのコミュニケーション方法も変容し、殺伐としたものを感じますが、また、元通りの生活に戻る日が待ち遠しく、自身を見つめ直す日々を送りたいものです。

「ペスト 改版」

書誌情報

請求記号 : 953.7-C14

配架場所 : 文庫・新書コーナー (1階)



お薦め図書を紹介

本学の図書をご紹介します

「慢性疾患を生きる ケアとクオリティ・ライフの接点」

成人看護学 准教授 榊澤三奈子

長い経過を辿る慢性病を持ちながら生活している人々と家族がどのような暮らし方をしているのか、その体験の理解に役立つ秀逸な一冊である、「慢性疾患を生きる ケアとクオリティ・ライフの接点」アンセルム・ストラウス (Anselm. L. Strauss) (著), 南裕子監訳, 1987 をご紹介いたします。

本書は、今から36年前にアメリカで出版された原書の翻訳書です。著者であるアンセルム・ストラウスは、1960年代にカリフォルニア大学サンフランシスコ校の看護学部行動科学学科に責任者として招かれた社会学者で、以降、教授として教鞭をとる傍ら、病院や家庭で慢性病患者との面接や参加観察により調査を続け、慢性病患者の世界で生じている現象の本質を探究してきた人物です。看護の世界では、「現象に基づく理論: grounded theory」を開発した研究者の一人として大変著名な人物です。本書の内容は、ストラウスとその研究仲間や同僚らによる長年の研究成果に基づいて記述されています。

本書との出会いは、私が看護学部4年生の時、ちょうど卒業研究に取り組みはじめた頃でした。ある慢性疾患を持つ人々の暮らし方についてのフィールド調査を行うにあたり、その人々が病気を持ちながら家でどのように暮らしているのか、症状の悪化を防ぐために日常生活・社会生活をどのように工夫して営んでいるのかほとんど知らないことに気づき、図書を探しまわり手に取った一冊が本書でした。以後現在まで、がんをはじめとする慢性病を持つ人々を理解しようとする時に、本書は私が初心に立ち戻るための大切な一冊となっています。その理由として、皆さんに本書の2つの魅力をご紹介します。

1つは、慢性疾患を持つ人々が療養法を続けながら、普通に生きて普通の付き合いを保つために行っている工夫について、人々の生の声に基づいてわかりやすく述べられていることです。本書では、これらの工夫を含め、人々が身体的、社会的存在として機能するために行っていることを「仕事」と呼んでいます。具体的な「仕事」には、自分の身体の状態を独力で把握する、症状に合わせて生活習慣や職場での働きかたを修正する、症状が他者との付き合いに及ぼす影響を最小限にとどめようとさりげなく症状を隠す、などがあります。これらの「仕事」は、うまくいくこともあれば失敗することもあるのですが失敗の体験さえ糧とし智恵を駆

使して生み出されたもので、慢性疾患を持つ人々のしなやかに生きる力が鮮やかに伝わってきます。本書を読むにつれ、療養の主体が間違いなく慢性疾患をもつ人々であり、彼らの「仕事」がうまくなされるよう、どのような情報や資源を提供できるか、どのように「仕事」を支えるのか、私たち医療者にたくさんのヒントをもたらしてくれるでしょう。

もう一つの魅力は、慢性疾患を持つ人々の家族が行う「仕事」についても、家族の語りを基に述べられていることです。「仕事」には、療養行動がうまくいくために行う調整行為や身代わり活動、家庭内の役割分担の変更、こっそり行われる励ましや気遣いなどがあります。これらの「仕事」は家族が担う負担でもありますが、家族各人がお互いの新しい面を発見して満足していく家族の在りかたを見出すことに繋がる可能性が示されています。

医療者は、時に患者をお手伝いする存在として家族をとらえがちですが、本書により、家族もまた慢性疾患を持つ人々とともに生活を再編成する人々であり、援助・支援の対象であることに気づくことでしょう。

本書が出版されて以来、日本では諸々の施策の結果、慢性疾患の療養の場が病院から外来・地域へと移行してきました。しかし慢性疾患を持つ人々と家族の生活に触れる機会が増えた現在、彼らがどのような問題を抱えてどのようにそれらを克服したり耐えたりしているのか、私たちはどれほど知っているのでしょうか。本書に関心をもち、手にとられた皆さんと、彼らの生の声から紡がれた体験を理解することの喜びを分かち合えることを楽しみにしています。



「慢性疾患を生きる
ケアとクオリティ・
ライフの接点」
書誌情報

請求記号：493.1-St8
配架場所：棚7左側（1階）

「図書館のちからプロジェクト」活動紹介

図書委員（地域看護学 講師） 野口 裕子

図書委員会では、平成27年度より「図書館のちからプロジェクト」を実施しています。その目的は、1人でも多くの学生が書籍に触れ、対象（患者）理解という側面から、学生が看護職として社会に出るための基礎作りに貢献することです。

ブックハンティングの様子。真剣に選書しています。



例年、新入生歓迎イベントや学生ブックハンティングを実施しているのですが、今年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため、新入生歓迎イベントは中止になりました。

そこで、昨年度実施した学生ブックハンティングの取り組みについてご紹介いたします。

「学生ブックハンティング」は、学生自身が書店に赴き選んだ本を実際に図書館に置くために実施しています。昨年度は10月15日・16日の2日間にわたって実施しました。学部生たちは、上越市内にある鳥屋書店高田西店に自ら行き、他の学部生にも是非読んで欲しい書籍を選定します。選定後は、選んだ理由や是非読んでほしいメッセージを学生自らポップを作成して図書館で紹介しました。参加学生は、1年生1名、2年生9名の合計10名でした。皆さん、楽しそうに選書をしていました。

以下に、参加した学部生の感想をいくつかご紹介いたします。

「自分のために本を選ぶのも楽しいけれど、図書館を利用するみんなのために本を選ぶのは、もっともっと楽しいことなんだな☆と思いました。」

「普段あまり本を読まないのですが、おもしろそうな作品がたくさんあって、読んでみたいと思いました。活字にふれるいい機会になりました。」

「昨年に引き続き2回目の参加でした。このような機会がないと本屋にも行かないので、“今”世の中でどんな本が発売され、人気なのか知ることができて楽しかったです。」

「『本を読むのは好きだけど買うのはちょっと…』となりがちな私にとって、このブックハンティングは身近にある大学の図書館に気になる本を入れることが出来るという素敵な機会でした。図書館に入って読めるのを楽しみにしています☺️」

「気になっていた本を入れることができ良かったです。少しでも多くの人に手に取って頂きたいと思います。」

「本について関心を持つことができました。」

「これをきっかけに図書室利用者の読書の幅が広がると嬉しいです」

「普段読まないようなジャンルに挑戦できてよかった。」

また、参加した学部生が自ら作成したPOPは個性的で素晴らしく、図書館内で展示したところ、学部生52冊・教職員32冊の貸し出しがありました。

学生ブックハンティングを通して、図書館の利用や図書の貸し出しが増加したことは大きな成果となりました。

ご協力いただきました学部生の皆さん、本当にありがとうございました。

まだまだ、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止に努めていかなければなりません。新しい形の「図書館のちからプロジェクト」の活動を検討しています。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年度実施したブックハンティングで、学生が作成したPOPです。



図書館内にPOPを展示した様子です。

電子ブック電子ジャーナルの利用方法

学内者限定サービス

【学認】 をご存じですか？

【学認】とは、学術認証フェデレーションの略称で、大学が契約している電子ジャーナルのうち学認に対応しているデータベースや電子ジャーナルについては、学外から自身の大学ID等で利用可能となるサービスのことです。

メディカルオンライン等の本文を閲覧できるデータベースも対象のため、学認で利用できることを把握しているか否かで学習・研究活動に大きく差が生まれます。

どのデータベースが学認の対象か調べるには、看護大学ホームページの右メニュー「電子ジャーナル・電子ブックリスト」および「データベース一覧」を開いてください。【学認】と記載されているものが対象です。【学認】の文字をクリックすると具体的なアクセス方法を解説しているので、ぜひご確認ください。



〈対象データベース・電子ジャーナル〉

メディカルオンライン



国内医学関連ジャーナルの電子(文献PDF)配信サービス。自身の大学ID等で利用可能。

EBSCOhost



CINAHL Plus with Full Text, MEDLINE, Open Dissertations, 3つのデータベースの横断検索ができる。自身の大学ID等で利用可能。

Ovid Nursing Full-Text Collection



看護系雑誌の電子ジャーナルパッケージ。リモートアクセス用のIDとパスワードは学内限定アクセスページから取得する。

Maruzen eBook Library



電子書籍配信サービス。同時アクセス数はタイトルにより異なる。学外から利用したい場合は、リモートアクセスを申請する。

企画展示

「BOOKセラピー」 (2019年10月28日～11月22日)



全国各地の公共図書館（室）及び学校図書館等が連携し、アイデアや情報を共有することで、業務の省力化を図りながら、より活発で充実した読書活動が推進されることを目的に、本を介して心に潤いを与える展示「BOOKセラピー～本のお薬は、あなたのそばの図書館へ～」を開催しました。企画元は北海道の滝川市立図書館で、現在公共図書館25館・学校図書館4館の計29館が参加しました。新潟県内では当館が初の参加でした。

この展示に先立ち、リクエスト強化月間（7月）に「あなたのBOOKセラピーを募集！」と題してリクエストを募集し、計12名（教職員9名、学生2名、学外者1名）の方からおすすめがあった16冊を購入しました。

「泣いてスッキリしたい」「キュンキュンしたい」「おもいきり笑いたい」、「新しいことにチャレンジしたい」「とにかく癒されたい」など、お悩みの症状に効く処方箋を展示しました。



<展示の様子>



<最も人気のあったテーマ「思いっきり笑いたい」>

「看護大生のための スタートブック」 (2020年3月27日（金）～6月30日)

新型コロナウイルス感染症対策のため、例年通りの利用ガイダンス、新入生歓迎会による図書の紹介ができないことから、新入生向けのブックリストを作成し、展示の紹介と合わせて利用ガイダンス時に配布しました。



新任図書委員ご挨拶

地域看護学 准教授 井上 智代

4月より、図書委員会のメンバーになりました。図書館は、独特な本の香りが漂う中、静かで落ち着き、知的好奇心を刺激してくれる空間であり、快適で心を豊かにしてくれる場所と感じております。図書館のすばらしさ、楽しさを利用される皆様と語りながら、より素敵な図書館になるよう頑張ります。



退職図書館職員

笹野 久雄

9月末で契約満了に依り退職致しました。

皆様方のおかげで、無事5年間努めることができました。又、図書館で懸命に勉強する学生さんの姿に深い畏敬の念を抱いた5年間でもありました。本当にありがとうございました。皆様方の益々のご活躍を祈念いたします。

新図書館職員

渡部 八重子

10月より図書館でお世話になります。

館内の専門書の多さに驚く毎日です。一日も早く仕事に慣れ、皆さまのお役に立てるよう、頑張ります。よろしくお願いたします。

展示ケース

当館では、本学教員の研究課題・著書・雑誌投稿論文等を入口の展示ケースで紹介しております。季節に合った飾りつけとともにぜひご注目ください♪



<2020年6～9月の展示は野口講師の雑誌投稿論文を紹介しました>

